

〔競物名彙上〕春村按ふに、右のうち山家集の、かひありな云云と、今ぞしる云云との歌は、貝合と貝覆とを、ひとつにおぼえてよまれたるに似たり、抑貝合はさまざまの貝をあはせて、それに歌をもよみそへ、さて甲乙を定むるなり、又貝覆ははまぐりの貝を、片おもてづ、そこら散しおきて、其片おもてをおほひ合せて、勝まけを争ふなり、さるをひとつにせられたるは、いかにぞやおぼゆるぞかし。

〔風葉和歌集十八〕人々つどひ侍て貝合し侍りける所に、負なんすと幼きもの、歎きけるに、誰ともなくて云ける、
貝合の藏人少將

かひなしと何歎くらんぞら浪も君が方には心よせてん

〔堤中納言物語〕かひあはせ

このひめ君とうへの御かたのひめ君と、かひあはせさせ給はんとて、月ごろいみじゆあつめさせ給ふに、あなたの御かたは、だいぶの君侍従の君と、かひあはせさせ給はんとて、いみじくもとめさせ給ふなり、まろが御まへはたゞわかざみ一とこゝろにて、いみじくわりなくおぼゆる略は、○下

〔雍州府志七〕土産貝 倭俗婦人合貝爲遊戯其法以三百六十之貝左右分之圍並床上空其中央貝一雙内右貝稱地而並床上左貝稱出每一箇而出置中央之隙地各圍坐視之則出貝與地貝其紋采有合者則取出貝合地貝其所合之貝多者爲勝少者爲負其貝大蛤蜊也始出自伊勢桑名海濱今大者絶故多用朝鮮貝也桑名貝其形色麗而有温潤朝鮮貝形色共魚惡而不及之畫草子屋并張子屋多製貝并桶而賣之凡盛貝器其形似桶故稱貝桶

〔めのとのさうし〕御かひめしいだされ候は、まづひだりをもちてまいり、のちにみぎをまいらせ候御かひうつして、二かたへわけて、くちにしろきを、十二にても、おほきならば十にても、げに